

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	道徳の授業としての文芸教育：片上伸における文芸教育論に着目して
別タイトル	Literature Education as Moral Education : Focusing on Katagami Noburu's Literature Education
作成者（著者）	李, 舜志
公開者	東邦大学教員養成課程
発行日	2020.12.28
ISSN	24358290
掲載情報	東邦大学教職教育研究. 3. p.11 22.
資料種別	紀要論文
内容記述	研究論文
著者版フラグ	publisher
メタデータのURL	https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD11844598

道徳の授業としての文芸教育

—片上伸における文芸教育論に着目して—

Literature Education as Moral Education:
Focusing on Katagami Noburu's Literature Education

李 舜志

Sunji LEE

はじめに

本稿の目的は、文芸評論家である片上伸(1884 - 1928)の文芸教育論を検討することによって、道徳の授業として文芸がどのような役割を果たすのか、明らかにすることである。

片上は文芸評論家として活動しつつも、八大教育主張にて自らの教育論を開陳するなど、教育に並々ならぬ関心を抱いてきた。しかし「他の論者達（樋口長市，河野清丸，手塚岸衛，千葉命吉，稲毛金七，及川平治，小原国芳など）とちがった異質の理論家であった」と言われるように（川瀬 1976 : 40）、片上は教育界からは部外者として目されていた。そのことについては「私は或ひは門外漢でもあらう」と述べるように（片上 1973 : 61）、片上自身もまた自覚していた。

そのため片上に対しては「教育の本分を理解していない」という批判がなされてきた。たとえば龍山は、片上の芸術を中心に据える教育論に対して、「今日の教育界に於て芸術教育が高調せらる々結果、あまりに之が価値を絶対視し芸術の教育が教育作用の全体であるかの如く考ふるものが生じたことは大に警むべきである」と批判する（龍山 1924 : 102）。また有田は、道徳から離れ美を追究する片上の姿勢は、教育の本分にもとるもの

として批判されてきたとまとめている（有田 2003 : 200）。

しかし後に見るように、片上は教育において美を強調し道徳をないがしろにしたのではなかった。それどころか片上自身は、文芸教育を道徳教育として構想していたのである。片上は文芸評論によって得た成果を、第一次世界大戦やロシア革命の勃発といった世界情勢と重ね合わせることによって、デモクラシーと教育の世界史的使命についての考察へと至る。ここでデモクラシーとは道徳の世界化を意味し、この道徳の世界化を促進するものこそ、生命の表現としての芸術、文芸なのであった。したがって片上は、後に文芸教育論を提唱するに至るのであるが、それは同時に道徳教育論でもあった。

したがって本稿では、片上の文芸教育論がなぜ、どのように道徳教育論として構想されたのか、検討することにしたい。以下では、文芸評論家であった片上が教育について語るまでの経緯を検討し、その過程で、文芸、デモクラシー、道徳教育がどのように結びついていったのか明らかにする。はじめに、まずロシアへと渡航する以前の論考から、文芸評論がどのように片上の思想を形作っていったのかを概観する。次にロシアから帰国後の論

考から、第一次世界大戦やロシア革命といった世界情勢が、片上にデモクラシーと道德教育についての思索をもたらしたことを示す。そして以上の分析に基づき、片上の文芸教育論が道德教育論として構想されていたことと、その内実を明らかにする。

1. 文芸教育論以前の片上伸

①教育への興味の萌芽

片上が教育に興味を抱くようになったのは、ロシア滞在中の大正五年春、山本鼎とともに子供の絵の展覧会と農民美術の展覧会に接してからだと言われる(有田 2003: 184)。たとえば片上は、モスクワで開かれた第一回全ロシア中等学校ロシア語ロシア文学教師会議に参加した際の感想を、「ロシアの学校に於ける文学」において次のように語っている。

その開会式に於けるモスクワ児童自由教育会の祝辞が、如何に端的に犀利に民間教育者の心を表白したものであったか、満場二千餘の会衆が如何にそれを迎へたか、会期中の会員の言動が、如何にロシア中等教育の面目をあからさまに示したが、それ等は今尚自分の記憶に新しいところである(片上 1973: 167)。

そして、『文芸教育論』所収の論考がほぼ大正八年から大正十年にかけての三年間に発表されていることからわかるように(根本 1981: 142)、ロシア滞在中に萌した片上の教育への興味は、帰国後に集中的に展開されることとなった(1)。片上は、山本が自由画教育と農民美術の運動を興すと積極的にそれを支援し、大正八年四月に長野県神川小学校で開かれた第一回児童自由画展覧会では「感情教育の現実及理想」という題で講演した。そして児童自由画展の感想を「第一回児童自由画展覧会を観て」において次のように語ってい

る。

一体この展覧会を催すについて、山本君を刺激したのはモスクワでの児童絵画展覧会がもとなのです。モスクワではちょいちょいこの種の展覧会がありました。自由画展覧会とはいはないで、『児童の創造』といふ名前でやってみました。ロシアでは臨本教育といふものはやってみません。随って「自由」といふことを特に標榜せずとも、それは勿論のことなのです。日本でも一日でも早く臨本教育といふものをばやめて貰ひたいと思ひます。(尤も用器画は別)。一体日本の教育には、芸術方面が恐ろしく虐待ということは、真実な人間らしい感情を殺すといふことになるのです(片上 1973: 192 - 193)。

以上のように、片上はモスクワの教育者や山本鼎らによる自由と創造を重んじる教育実践に触発され、当時の日本の教育を批判するに至った。当時の日本における文学教育は臨本教育、すなわち手本となる文章の臨写が中心であり、それは片上の目には生徒の「芸術的思索」や「直覚的感觉力」の成長を阻害してしまうものとして映った。したがって片上による文芸教育論は、生徒の自由や創造を重んじるものとなるのであるが、しかしこの着想はロシアにおいてはじめて得られたものではない。少なくとも、渡航以前の文芸評論において、片上の教育論の萌芽を見出すことができるのである。

②ロシア渡航以前の文芸評論

片上は1913年に刊行された『生の要求と文学』において、当時の国内外の文芸思潮を概観しつつ、「ロマンティズムが創造の藝術であったのに對して、リアリズムは新しい批評的精神の發露した藝術であった」と評価す

る（片上 1913 : 1）。リアリズムとは現実を偽りなく見つめ描き出すことであるが、この「現実」とは「感覺的物質的の實在をのみ意味するのでは勿論ない」（片上 1913 : 20）。「現實の眞性は、人間の本性そのものに外ならない。人間生活そのものに外ならない」のである（片上 1913 : 19）。このようにリアリズムによって描き出される人間の本性およびその生活とは、固定され静的なものではなく、変化し続ける生命の流れである（片上 1913 : 20）。たとえば片上にとって、ヴェルレーヌやドストエフスキーらは変化なく固定して見えるものの中から変化を認め、生命の流動を導いた作家として評価される（片上 1913 : 17）。「この無限の生命の力を信じ、無限の生みの力を有することが、批評と創造との精神の本意である」（片上 1913 : 24）。

したがって、リアリズムがそこから発露する批評的精神とは、「人間生活の確實なる根拠を築き上げる爲めに、新しい生活を作り出す爲めに、古きものと虚偽とを破壊することだと言われる」（片上 1913 : 6）。「批評の眞の意味は、あくまでも創造でなければならぬ」のである（片上 1913 : 7）。このように、片上にとって批評的精神とは古きものと虚偽とを破壊し、新しい生活を創造すること、「あらゆる固定せる障壁を突破して、常住不斷に前進する」ことを指すために（片上 1913 : 7）、批評とは将来の可能性を信じることによって可能となる営みだと定義される。「現在に對する批評なしには、將來の可能を信ずるといふことは無意味である」（片上 1913 : 11）。

以上のように、片上は1913年の時点で、ロマンティズムやリアリズムと言った思潮について検討を重ね批評と創造の意義を見出した。それは、人間存在およびその生活の根底に流れる、変化し続ける生命の流れを認めることである。これらの主張から、この時期の片上は主客の合一や大自然の調和を志向す

る、いわゆる「大正生命主義」の潮流の中に位置づけられると言えるだろう(2)。そして上記の着想が、第一次世界大戦やロシア革命といった世界情勢と呼応することによって、デモクラシーと教育についての思索へと結実することとなる。

③ロシアから帰国後、デモクラシーと道徳教育

1914年に勃発した第一次世界大戦は、戦闘が主にヨーロッパ大陸で行われたため、文学者の間では日露戦争の時のような鋭い反応は少なかったと言われる（池内輝雄 1996 : 189）。しかし第一次世界大戦期は、日本がいまだ西欧列強から圧迫を受けており、アジアにおける安定的な支配が脅かされるのではないかという対外的危機意識に基づき、様々な改革要求——たとえば貴族院改革、兵役制度改革、普通選挙制度実現など——が国内で広く論じられていた時期でもあった（加藤 2005 : 101）。このように国会改革要求とも見なしうる、包括的な制度改革が要求された時代において、「大正デモクラシー」と称されるように、民衆の解放の思想、また民本主義や人道主義の思潮が台頭した。

以上のような国内におけるデモクラシーの思潮の隆盛を背景に、日本人も含めた連合国側の多くは第一次世界大戦を「専制政治対民主政治」の戦争と位置付けていた（鈴木 1996 : 103）。片上もまたロシアから帰国した後の1919年、『思想の勝利』という好戦的な題を冠する著作において、世界の覇権を握るに至った「デモクラシー」を中心に据えて自らの主張を展開していく。

まず確認すべきは、片上におけるデモクラシーとは意志決定の手続きやその機構を指すのではない、ということである。それは「生活態度としてのデモクラシー」であり、「要するに最も人間らしく生活することを意味する」（片上 1919a : 9）。「デモクラシーの本意

は、人間を人間らしく見て、人間の本性の自然な當然な要求をどこまでも遂げしめようといふところに在らねばならぬ。人間の本性の要求に基いて、一切の人間生活を導いて行かうとするのに在らねばならぬ」(片上 1919a : 11 - 12)。

このように、デモクラシーとは人間の本性を認め、それに従い人間生活を導くこととされる。それは「過去五年に亘る世界大戦の間に、デモクラティックな傾向があらゆる方面に亘つて著しく現はれて来たこと」から確認され、またさらに片上は、「その傾向があらゆる方面に亘つて將來ますます伸長して行くであろうといふことは、今日に於いてはもはや到底否定することの出来ない事實である」と予言する(片上 1919b : 155)。片上にとって第一次世界大戦とは人間の本性を認め、それに基づき生活を導くデモクラシーの勝利なのであり、ロシア革命もまた「侮蔑せられた人間の本性が、自己の権威を主張するところに」勃発したと片上によって解釈される(片上 1919a : 44)。

片上はさらに、人間の本性の発露が道德の涵養においてきわめて重要な役割を果たす点を指摘する。というのも、「人間と人間とを結びつける力の中で、人間の本性の力ほど直接的な、自然な、必至な、強い力」はないからである(片上 1919a : 11)。「實に、一切の道德は、この人間の本性に發してゐるのではないか」(片上 1919a : 11)。したがって人間の本性を認め、そこから人類の生活を導くデモクラシーは、「道德を世界的に普遍的に實行することを求める」(片上 1919a : 16)。「デモクラシーといふ言葉は、専ら政治の方面にのみ限られてゐるのが普通であるが、その方面に於いてすら、やはりその本意は上に言ふところの道德の擴大普遍化といふ一點に在るといはねばならぬ」(片上 1919b : 156 - 157)。

そして、この道德の世界化に従事すべきは、誰よりもまず「精神教育に従事する人々」

と言われる(片上 1919b : 159)。教育者こそデモクラティックであらねばならない、なぜなら「デモクラシーは教育の基礎なしには成り立たない」からである(同上)。片上は、デモクラシー、すなわち「善良にして公正で合理的な人間本性の自由な発現」とは、教育によって促されなければならないと考えた。第一次世界大戦後の世界は、教育によって道德の世界化の実現に邁進することを使命とするのである。

しかし片上は当時の教育および教育者たちがこの使命を担うると考えていたわけではない。「今の教育家と稱する人々が、自家の事業に於いて何等新生面を開き得ず、何等生命ある効果をあげ得ないのは當然である。即ち今の教育家と稱する人々が最も時勢に疎く、最も固陋な思想を抱いているからである」(片上 1919a : 89)。なぜなら、彼らは「時代の雰囲気を作る主力であるところの、文藝思潮を重大と見るだけの勇氣と謙遜と親切とを缺いてゐるからである」(片上 1919a : 89 - 90)。このように、当時の片上は教育によるデモクラシーあるいは道德の世界化の実現に期待を抱くと同時に、文芸をないがしろにする既存の教育への不満も抱いていた。したがって、文芸評論家であった片上伸は、自ら教育論を著すことを決意するのである。

以上から、文芸教育論を著す以前に、片上がどのような芸術観および教育観を抱いていたのかが示された。片上はロマンティズムやリアリズムと言った文芸思潮について検討を重ね、文芸とは人間存在およびその生活の根底に存する、変化し続ける生命の流れを認める営みだと定義する。そして上記の生命主義的思想が、第一次世界大戦の連合国側の勝利やロシア革命の勃発といった世界情勢と呼応することによって、デモクラシーと教育についての思索へと結実することとなる。デモクラシーとは人間の本性を認め、そこから人

類の生活を導くことであり、それは道徳の世界化を意味する。そしてこの道徳の世界化を促進するものこそ、生命の表現としての芸術、文芸なのであった。しかしこのデモクラシーの促進を担うはずの教育者は、文芸の重要性を看過していた。したがって文芸評論家であった片上は、後に文芸教育論を提唱するに至るのである。

2. 文芸精神に基づく文芸教育

①シンボリズムとしての芸術

ここで文芸教育論の検討に入る前に、当時の片上の芸術観を確認しておきたい。

1919年に刊行された『思想の勝利』においても、片上における批評と創造に対する見解は変わっていない。「生活が成長し深まり行くためには、批評の精神と創造の力が、切り離すことの出来ない力となつて、生活の内部から發動せねばならぬ」(片上 1919a : 180)。このように「生活の新しい成長」とは、批評や創造が生活の内部から突き動かされることによって可能となるのであり、このようにして「生活の新たに成長し、新たに深まつたところに、生活の統一せられた姿がある」と片上は主張する(片上 1919a : 180)。

この時期の片上の文芸評論において顕著であるのは、当時の世界情勢を反映してか、「現実に対する不満」の働きを重要視する点である。たとえば「現實に對する理解、洞察、それ等の深さ廣さが、現實に對する不満の深さ強さを決定する。而して現實に對する深い強い不満があつて、本質的な純真なものに對する思慕も追及も、初めて本氣な強いものとなる」(片上 1919a : 212)。このように、現実に対する不満があつてこそ、本質的なものや純真なものへの要求も強まるのであり、「そこに初めて新生活の創造を欲する心が本氣な根本的なものとなる」(同上)。

ここで新生活の創造を欲する心とは、「心髄から迸り出た包全的なもの」だと言われる

(同上)。このように「心髄から迸り出た包全的なもの」とは、眼前に対象化することができず、むしろ「雰囲氣」や「気分」のような人間存在を包み込むものだと言われる(3)。雰囲氣とは呼吸であり、人為的に変えようとしても変えることができず、隠すことも偽ることもできない生命の波動から生まれる。人は日常生活において、呼吸していることを忘れるように自己を取り囲む雰囲氣を忘れてしまう(片上 1919a : 90)。

このように、人間存在を包み込む、分節化や対象化が不可能である生命を媒介するものこそ、片上にとって芸術であり、文芸なのである。「個々の部分に全生命の呼吸を聴き個々の現實に人生の深い味ひ」を見出すものとは、シンボリズムとしての芸術だと言われる(片上 1919a : 212)。「要するに藝術に對する要求は、ライフをシムボライズして貫きたいといふ要求である」(片上 1919b : 21)。芸術とは人間存在を包み込み、また無限に変化していく生命を、個々の部分をシンボルとして配置することによって表現するものである。「生命の具體的表現として、藝術は最も自由な、最も直接的な最も集中的な表現である。随つて生命そのものが無限であり、無限の變化であるやうに、藝術も亦た無限に其価値が變つて行く」(片上 1919b : 22)。

そして、生命を媒介する芸術という観点から、片上における文科教育の本意も汲み取られなければならない。「そもそも文科教育の本旨は、最も廣い意味で文明を批評し指導し創造する根本的な教養と精神とを與え養ふことにあらねばならぬ」(片上 1919a : 96 - 97)。人生に対する統一的な見方、動的な見方、人生に対する批評的精神を深く強くすることが文科教育の根本の主旨でなければならない(片上 1919a : 103)。ここでは文科教育こそが、デモクラシーすなわち道徳の世界化を促進するものだと言われる。なぜなら文科教育とは、片上にとって人間存在を包み込む包

全的なものを対象とするものだからである。文科教育は、無限に変化していく生命を感じ、その具体的表現と関わる教育であり、その意味でデモクラシーの先導者の教育を意味していた。この文科教育への言及から数年後、片上は自らの文芸教育論を本格的に展開することとなる。

②文芸精神の浸潤のための文芸教育

片上は『文芸教育論』冒頭に所収された論考「文芸教育の提唱」において、「現代の一切の不安は、表面的な部分にこだはって、それを全体的意義に於いて見ないという点に濃厚にせられてゐる」と診断する(片上 1973: 2)。ある人、物、出来事は、「それが断片として見られる限りに於いて、価値に乏しかったり、若くは無価値でさへあつても、これを全体のうちに於いて見ると、そこに新しき生命の光りを発することになる」と片上は考える(片上 1973: 11)。ここからわかるように、文芸教育を論じるにあたって、片上の議論の基礎には「生命」が据えられており、この点において以前からの生命主義的思想が継続していることがわかる。またすべての人間存在は、共通して「生活を片面的部分的断片的でなく、包全的に、集中的に、総合的に観ようとし、感じ味はうとする」と言われるのであるが(片上 1973: 23)、ここでは前節で取り上げた、包全的なものの感受について言及されている。

以上の引用から容易に推察されるように、片上にとって文芸教育とは、文学作品の鑑賞方法や作文技術の指南を指すものではない。それは「文芸上の作品を味はしめたり、文芸上の作品(絵画文章等の)を作らしめたりすることの間に、真の文芸が有する人生の包全的総合的な味ひかた観かたを、自然に会得修練せしめて、理屈や規則や訓戒などで到底与へられない一種の人間生活信愛感とでもいふべきものに感染せしめようといふ」試みだと

言われる(片上 1973: 43 - 44)。文芸教育とは、部分や断片としては了解不可能な、人生の包全的な見方の修練なのであり、それにより「人間生活信愛感」を育むことなのである。

片上の文芸教育とはこの「文芸精神」の涵養およびその社会への浸潤を目指すものであり、これが多少でも試みられたならば「のびやかな、安らかな、窮屈でない心持ちで、人間同士を愛したり赦したりすることが出来るやうになり、互ひに助けたり、頼つたりする美しい関係も成り立つでせう」と述べる(片上 1973: 44)。これまで検討してきた、文芸を通じたデモクラシーの促進、道德化が、文芸教育論の中に組み込まれていることがわかる。

以上のように、片上は奨励するのは「生活を片面的部分的断片的でなく、包全的に、集中的に、総合的に観ること」である。文芸はそのために要求される。というのも文芸によって「人は、人間の生活が決して表面の事相によって、即ちそれをばらばらに切り離しては容易に判断の出来ないものであるといふことを、理屈としてでなく、道德上の教訓としてでなく、自づから心の生活の全面に滲透するところの実感として悟り感ずるであらう」からである(片上 1973: 55)。「表面的な部分にこだはって、それを全体的意義に於いて見ない」ことによって不安に苛まれる時代に、文芸精神は、シンボルとして包全的なものを媒介する働きゆえに要請されるのである。

③教師と生徒のための文芸教育

それでは文芸精神の浸潤を目指す文芸教育とは、どのようなものなのだろうか。先述したように、片上にとって「真の文芸は、一切の人生をただそれだけの事実として見たり、感じたりすることにとどまつてゐない」(片上 1973: 42)。「それをその事実の含くみ得る限りのあらゆる意味に於いて、またその事実の

関聯し得る限りのあらゆる関係に於いて、これを人間生活の複雑な交響楽の中に溶かし込んで、そこに飽くまでも有機的な、総合的な味ひを見出さうとする」ものである(同上)。したがって文芸教育とは、単なる作品鑑賞にとどまらない。それは、作品における逸話や登場人物の行動を「人間生活の複雑な交響楽」における一要素として見出すことである。

この意味に於いて、文芸は、人生の姿を部分的に否定したり隠蔽したりしないで、その全体としての複雑な意味を味はしめることによつて、人間生活に対する寛大な包容力と、中心生命の力の尊さに対する信頼の念とを養つてゆくのです。つまり文芸は人生の如何なる断片をも、これを断片として見ないで、その有機的、総合的、包全的の意味に於いて、見たり、感じたり、味つたりすることによつて生れるものであり、又その文芸を鑑賞する人をして、如何なる人生をも、有機的、総合的、包全的な態度心持ちをもつて、年少子弟の生活を取り扱ふことをいふのです(片上 1973:42)。

上の引用において興味深いのは、「年少子弟の生活を取り扱ふこと」、すなわち教師の仕事もまた、文芸鑑賞のように、人生の断片を有機的、総合的、包全的に見、感じ、味わうことだと言われている点である。年少子弟たちによる文芸鑑賞だけでなく、彼らと向き合う教師もまた、文芸から学ばなければならない。

したがって、文芸教育は「人間生活を全体として、見且つ感ずることに、その中心生命を置かなければならない」(片上 1973:41)。このような教育は、一見すると単なる悪事ではないものを、複雑な関係性——人間生活の複雑な交響楽——の下において見出だすこ

とを可能にする(片上 1973:52-53)。年少子弟だけでなく、教師もまた「複雑な生動して止まない人間生活」(片上 1973:201)を感受することによって、彼らの「生活は断片から全体に甦り、固定から自由に甦る」のである(片上 1973:124)。

以上から、片上の言う、文芸精神の涵養を目指す文芸教育とはどのような営みかが示された。文芸精神とは、ある出来事をそれが属する全体から捉え、それによって無限に流動して止まない生命を感受する精神であり、この精神の涵養こそが文芸教育の目的となる。この文芸教育を通して、価値が無いと判断された事柄や物は新たな光の下に照らし出される。むしろ「文芸は罪人を弁護する役目をつとめるものでは勿論ない」が、しかし文芸教育とは「一部局の罪悪のために、全体の人間生活を否定するやうな、断片的な態度をとるものでもありません」(片上 1973:43)。複雑な交響楽のように、部分と全体が相互に絡み合い織りなされたものとして人間存在およびその生活を捉えること、それによって「すべてのものが生れ、蘇り、すべてのものが深い興味と、新しい価値とをもつて再現されます」(同上)。そこには白か黒か、一色で判断することの出来ない色彩の交響楽があり、「そこには人生の複雑な、生かす力の流れが、音なく、しかしながら底深く湛へてゐることが感ぜられます」(片上 1973:43)。そして以上の文芸教育は、片上によって道徳教育としても語られることとなる。

3. 道徳教育としての文芸教育

① 日常の些末事における道徳的意義

前章では片上の文芸教育論について概観したが、それではそこで目指されている「人間生活を全体として、見且つ感ずる」とはどのような事態を指すのであろうか。ここでは片上によって挙げられた例を参照したい。

例へば一人の勤め人が雨の降る朝に勤先へ出掛けるとする。雨の降る事を知つて困つたことだと思ひ、こんな日には家にゐて差し支へないやうであればいいのと思ふでもあらうし、又しかしながら、休んではならないと思つて出掛けてゆくでもあらう。子供がその父親の後を追つて泣きでもすれば、心を引かれもするであらう。極めてありふれたかういふ日常の些末事に就いてみても、その当事者の心持ちには、いろいろの心持ちが織り交ぜられてゐて、その当人もその周囲も、これに対して一々道徳上の判断を加へたりはしてゐないのである (片上 1973: 57)。

以上のように、このような「日常の些末事」から片上は、億劫に思う気持ちや、子どもによって引き留められる父親の心情など、日常生活を織りなす様々な心持を見出している。しかし「雨が降っているので勤め先に行きたくない」という、このありふれた、一見すると道徳的教訓を引き出せそうにない場面が、どのように道徳教育に資するものとなるのか。

確かに、「義務を重んずるといふことからいへば、雨の降ることや、子供の後を慕ふなどといふことは、問題にすべきでないかも知れない。従つて少しでもそれらのために勤めに向ふ心持ちを弛めることは、いけないことであると言はれなければならないかも知れない」(同上)。しかしながら、父親が子供に心を惹かれるということは、「極めて自然な美しい心持ちであり」、また「雨が降れば出掛けるのがうるさいとか億劫だ」と思うことも、ただちに断罪すべきことではなく、「無理のない人情である」と言われる (片上 1973: 57 - 58)。

このように、片上はある場面から善悪をただちに断定するのではなく、些末な場面や心

情から「人間生活が白とか黒とかいふやうな、一色で判断することの出来ない色彩の交響楽」を見出すこと、またそこから「人生の複雑な、生かす力」を感受することを重要視する (片上 1973: 43)。というのも、「恐らくは人間の生活に於いて、かやうな様々な心持の複雑に織り交ぜられてゐないことは絶無であらう」からである (片上 1973: 58)。このように、片上にとって道徳教育とは、善悪を断定しうる特別で非日常的な出来事ではなく、ありふれた日常的な場面を通して、それが複雑な交響楽によって織りなされていることの感受を志向するものなのである。

②文芸の持つ道徳教育的教育

以上で取り上げたような日常の些末事を通して、人間生活を織りなす複雑な交響楽を見出すこと、生活を全体として考えることは、教育、特に「修身倫理の教科」が担わなければならない課題だと片上は主張する。しかし「これらの複雑な若しくは極めて無心にして単純な」心持は、「一切の道徳的義務から離れてゐる」ように見えるために、「今までの道徳教育は、殆ど何等の解釈をも、説明をも与へてはゐない」(同上)。先に挙げた場面やその心持は、一見すると道徳と関係の無いように見えるために、これまで道徳教育の題材とならなかったのである。

片上からすると、当時の道徳教育は「断片的な道徳種目の説明」に終始していた (片山 1973: 204)。「今日の修身倫理は、人間の道徳生活を小刻みにして、いろいろの標準をつくり、Aの場合にはAの規則、Bの場合にはBの規則を当てはめればよろしいと説いてゐます」(片上 1973: 38)。このように、当時の道徳教育は、あらかじめ作られた規則を適当な場面に当てはめることとその説明に過ぎなかった。そこで道徳的生活とは、定められた規則に従うこととして受け取られた。「要するに人間の道徳的生活に、ただ外面からさま

ぎまの絵具を塗り分けて見たやうなものであります」(同上)。

このように、「一個の人間として考へ、人間生活を全体として考へることを促し誘う筈の修身倫理の教科」は、「その実際に於いては、やはり人間の生活を部局的、断片的、片面的に説明してゐる程度にしか止まつてゐない」(片上1973:7)。したがって今までの道徳教育は「痒い所へ手の届かないやうな、その癖どこまでも強制的に自己の權威を認めしめようとするやうなもの」であつた(同上)。様々な心持によって織りなされる日常生活を無視し、ただ規則を暗記させるやうな当時の道徳教育は「痒い所へ手の届かない」ものであつて、したがってそれは「迂遠で、圧迫的で、ややもすれば滑稽でさへもあるやうに感ぜられた事も、やむを得ない次第である」(同上)。当時の道徳教育は、日常生活から乖離したただの規則の暗記であつたために、雰囲気のように人間を包み込み無限に流動する生命を看過するものだったのであり、それは圧迫的なだけでなく時に滑稽なものとして感じられたのである。

したがって、道徳教育が圧迫的でも滑稽を感じさせるものでもなく、「人間の心持」や「生活の事実」に基づいたものとなるためには、文芸から学ばなければならない。「人間の生活に対して、先ず第一に文芸の態度心持に学ぶこと」、それはすなわち、「人間の生活の個々の事実について、これを一定の規律に当て嵌めようとするこゝとなしに、その一つ一つの事実をその根本に遡り、そのあらゆる關係に於いて観察し、感受するといふ態度」を学ぶことである(片上1973:58)。これまで本稿で何度も検討してきたやうに、片上にとって文芸とは、「個々の部分に全生命の呼吸を聴き個々の現實に人生の深い味ひ」を見出すシンボリズムとしての芸術、すなわちある出来事をそれが属する全体から捉え、それによって無限に流動して止まない人間生活の

感受を可能にするものであつた。したがって道徳教育が人間の生活を織りなす複雑な交響楽へと至るためには、文芸から学ばなければならないと言われる。

この態度によって、生徒の生活は圧迫や禁止を伴う形式的な指導から解放されるのであり、それによって根本の生命力への信頼が芽生え、育てられることとなる(同上)。片上が教育の根本に見ていた道徳は、文芸精神に満ちたものでなければならなかつたのである。「文芸は人間の本性を深く広く養ひ来る根本的な、包全的な、かゆいところに手の届く力として、抜群の教育力を有する」(片上1973:58)。

以上、片上による当時の道徳教育の批判と、文芸の持つ道徳教育的意義を検討した。当時の道徳教育とは、「人間の道徳生活を小刻みにして、いろいろの標準をつくり、Aの場合にはAの規則、Bの場合にはBの規則を当てはめればよろしい」というものであつた。このやうに日常生活から解離し、痒い所に手が届かない当時の道徳教育は、圧迫的で時に滑稽にも感じられるものであつた。

代わりに片上が道徳教育の題材として取り上げるのは、雨が降っているので億劫に思う気持ちや、子どもを思う気持ちなどであつた。というのも、この道徳的判断や行動が必要とされない、一見すると何でもない場面においても、人間生活の複雑な交響楽、根底に流れる生命の力は感受されうるからである。道徳教育とは、人間生活の根底に流れる、常に變化してやまない生命の流れの感受でなければならない。というのも、前章でデモクラシーについて検討したやうに、片上は「人間と人間とを結びつける力の中で、人間の本性の力ほど直接的な、自然な、必至な、強い力」は無いと考へていたからである。道徳教育もまた、この人間同士を結び付ける力に基づいて行われなければならない。

しかし生命の流れは、雰囲気と称されるように、人間存在を包み込むものであり対象化不可能なものであった。したがって、片上は教育における文芸の重要性を訴える。というのも、文芸とは「個々の部分に全生命の呼吸を聴き個々の現實に人生の深い味ひ」を見出すシンボリズムとしての芸術だからである。それは「人間生活が白とか黒とかいふやうな、一色で判断することの出来ない色彩の交響楽」を見出すこと、またそこから「人生の複雑な、生かす力」を感受することを可能にする。作品中の逸話や登場人物、描写などを通して——登場人物の行動が善か悪か判断するのではなく——人間存在を包み込む生命の流れを感受すること、それを文芸は可能にするのであり、だからこそ文芸教育は単なる技術や知識の教育だけではなく、道德教育として捉え返されなければならないと片上は考えたのである。

おわりに

以上、本稿では、文芸教育論を発表する以前の論考を中心に検討することによって、片上の文芸教育論が道德教育論として構想されていたことを明らかにした。

第一章では文芸教育論を著す以前に、片上がどのような芸術観および教育観を抱いていたのかが示された。片上はロマンティズムやリアリズムと言った当時の文芸思潮について検討を重ね、文芸とは人間存在およびその生活の根底に流れる、変化し続ける生命の流れを認める営みだと定義する。そして上記の生命主義的思想が、第一次世界大戦の連合国側の勝利やロシア革命の勃発といった世界情勢と呼応することによって、デモクラシーと教育についての思索へと結実することとなる。デモクラシーとは人間の本性を認め、そこから人類の生活を導くことであり、それは道德の世界化を意味する。というのも、片上は「人間と人間とを結びつける力の中で、

人間の本性の力ほど直接的な、自然な、必至な、強い力」は無いと考えていたからである。そしてこの道德の世界化を促進するものこそ、生命の表現としての芸術、文芸なのであった。しかしこのデモクラシーの促進を担うはずの教育者は、文芸の重要性を看過していた。したがって片上は、後に八大教育主張における文芸教育論を提唱するに至るのである。

第二章では、片上の文芸教育がどのようなものとして構想されたのか概観した。文芸教育の目的とは「文芸精神の涵養」だと言われる。文芸精神とは、ある出来事をそれが属する全体から捉え、それによって無限に流動して止まない人間生活を感じ取る精神である。この文芸教育を通して、表面的には価値が無いと判断された事柄や物も、全体との連関において、新たな光の下に照らし出されることとなる。文芸教育とはこのように白と黒にはっきりと分けることのできない人間生活を取り扱うのである。むろん「文芸は罪人を弁護する役目をつとめるものでは勿論ない」が、しかし文芸教育とは「一部局の罪悪のために、全体の人間生活を否定するやうな、断片的な態度をとるものでもありません」(片上 1973 : 43)。複雑な交響楽のように、部分と全体が相互に絡み合い織りなされたものとして人間存在およびその生活を捉えること、それによってすべてのものが深い興味と、新しい価値とを持って再現せられること、この文芸精神の涵養という課題を、文芸教育だけでなく道德教育もまた担わなければならないと言われる。

そして第三章で検討したように、上記の文芸教育観に基づいて片上が例に挙げるのは、父親が子供に心を惹かれることや雨が降っているので出掛けるのが億劫だといったありふれた心情である。このように、片上は善悪をただちに断定でき道德的教訓を引き出せるような場面ではなく、日常生活の些末な場面や

心情を選ぶ。そしてそこから「人間生活が白とか黒とかいふやうな、一色で判断することの出来ない色彩の交響楽」があること、またそこから「人生の複雑な、生かす力」が流れていることを重要視する（片上 1973 : 43）。というのも、「恐らくは人間の生活に於いて、かやうな様々な心持の複雑に織り交ぜられてゐないことは絶無であらう」からである（片上 1973 : 58）。子どもに心を惹かれたり、雨が降っているので億劫に思ったり、花を見て美しいと感じたり、このような場面や心情こそが「人々の生活の実際の内容を成してゐる」のであり（同上）、文芸教育とはこのような「生活の実際の内容」に基づいたものでなければならない。

そして先述したように、この人間生活の複雑な交響楽、根底に流れる生命の力の感受は、道徳教育が特に担わなければならないと言われたのであるが、当時の道徳の授業は「人間の道徳生活を小刻みにして、いろいろの標準をつくり、Aの場合にはAの規則、Bの場合にはBの規則を当てはめればよろしい」というようなものであった。そうではなく、人間生活の根底に流れる、常に変化してやまない生命の流れを感受しなければならない。先にデモクラシーについて検討したように、片上は「人間と人間とを結びつける力の中で、人間の本性の力ほど直接的な、自然な、必至な、強い力」は無いと考えていた。したがって、道徳教育もまた、この人間同士を結び付ける力に基づいて行われなければならない。

しかし生命の流れは、雰囲気と称されるように、人間存在を包み込むものであり対象化不可能なものであった。したがって、片上は教育における文芸の重要性を訴える。というのも、「個々の部分に全生命の呼吸を聴き個々の現實に人生の深い味ひ」を見出すものこそ、シンボリズムとしての芸術だからである。芸術とは対象化不可能で無限に変化する

生命を、部分を通して表現するものである。作品上の逸話や登場人物、描写などを通して、人間存在を包み込む生命の流れを感受すること、それを文芸は可能にするのであり、だからこそ文芸教育は単なる技術や知識の教育だけではなく、道徳教育として捉え返されなければならないと片上は考えたのである。

以上、本稿では片上が文芸教育を道徳教育として構想していたこと、およびその内実を明らかにした。今後の課題としては、片上が構想していた具体的な教育実践についての検討が挙げられる。たとえば註でも触れたように、片上は山本鼎、北原白秋らとともに教育雑誌『芸術自由教育』を創刊し、それは教育界で『赤い鳥』に比肩し得るほどの影響力をもっていたと言われる。片上が自らの「文芸教育論」を実践にうつすべく活動したこの拠点において、どのような議論がなされていたのか、この点についての考察は、稿を改めて行うことにしたい。

註

(1) さらに大正十年一月には、片上は山本鼎、北原白秋らとともに教育雑誌『芸術自由教育』を創刊する。この教育誌自体は十号で廃刊となったが、上野浩道『芸術教育の研究』によれば、教育界で『赤い鳥』に比肩し得るほどの影響力をもったという。ここを拠点に片上はみずからの「文芸教育論」を実践にうつすべく精力的に活動した（有田 2003 : 184）。

(2) 有田は、ロシア渡航以前の片上の論考を引用しつつ、それらに類出する「人間生活の意欲」や「根本の生命」といったフレーズが、「片上の論が大正生命主義、狭くは生命主義芸術教育論思潮の勢力圏内にある事実を示してくれる」と指摘している（有田 2003 : 188）。

(3) たとえば片上は、「氣分とは自己の生命の全體の感じである」と述べている（片上

1919b : 5)。ここでもまた、雰囲気と同様に対象化可能なものというよりは、人間存在を包み込むものとして気分が扱われている。

片上伸の文献

- 片上伸 [1913]: 『生の要求と文学』、南北社。
—— [1915]: 『無限の道』、日月社。
—— [1919a]: 『思想の勝利』、天佑社。
—— [1919b]: 『草の芽』、南北社。
—— [1973(1922)]: 『文芸教育論』、
玉川大学出版。

参考文献

- 有田和臣 [2003]: 「眼の陶冶と帝国主義 (四) : 大正期文芸教育論と生命主義芸術教育論」、『京都語文』第10巻、pp. 182 - 207。
—— [2004]: 「生命主義芸術教育論の勢力圏——武者小路実篤、片上伸、小林秀雄の“自己表白”」、『文学部論集』88号、pp. 31 - 44。
池内輝雄 [1996]: 「戦争と文学」、『岩波講座日本文学史第12巻 20世紀の文学 I』、岩波書店、pp. 173 - 192。

- 加藤陽子 [2005]: 『戦争の論理——日露戦争から太平洋戦争まで——』、勁草書房。
川瀬八州夫 [1976]: 「大正新教育と芸術教育運動の思想—片上伸の文芸教育論を中心として」、『東京家政大学研究紀要』第1巻、人文科学第16号、pp. 37 - 47。
鈴木貞美 [1996]: 『「生命」で読む日本近代大正生命主義の誕生と展開』、日本放送出版協会。
龍山義亮 [1924]: 「眞の藝術教育」、帝国教育会編『藝術教育の最新研究』、文化書房、pp. 95 - 104。
中谷いずみ [2011]: 「一九一〇年代における『人格』と『芸術』——片上伸『文芸教育論』前史——」、『国語科教育』70号、pp. 123 - 116。
根本正義 [1981]: 「文学教育の研究序説」、『東京学芸大学紀要』32号、pp. 139 - 149。
橋本美保・田中智志編著 [2015]: 『大正新教育の思想：生命の躍動』、東信堂。
橋本美保 [2018]: 『大正新教育の受容史』、東信堂。